

今村 六王 議員



Q 南阿蘇村小中学校の耐震結果が発表されたが、計画を立てる為には、長陽地区の小中学校の統合の方針により順位が変るが、村の考えを問う。

A **村長** 学校の統合についての質問では、小学校について、小学校にしぼって回答させていただきます。

特に少子化の進行に歯止めがかけられない現況の中で、適切な義務教育の実施、環境改善していくためには、適正な学校の規模を確保していくことがクローズアップされてくる。

長陽地区の小中学校については、統合ということで過去答申がなされた経緯もある。

開会時に議員の手元に配布された10年後の児童数の予測では立野小、長陽西部小ともに、ひとケタまで落ち込む結果となっているので、長陽地区の小中学校の統合については、保育所の統合と併せて、喫緊の課題である。

「学校規模等審議会」でも検討をいた、だいているが、この統合問題については検討のスピードをあげて、できるだけ近い時期に統合時期などを示したいと考えている。

Q 学校施設は児童、生徒が一日の大半を過ごす活動場である。又、非常災害時等には地域住民の緊急避難場所として役割を果たすので、学校統合を決断し、子供達が安心して学び活動の出来る環境にしてもらいたいと思うが、村の考えを問う。

A **村長** 学校関係の改築については、耐震の結果も出たので、民意も必要だができれば12月の議会くらいまでには結論を出したい。早めに村の考え方を示して、地域住民の皆様方の理解を求めることを考え、具体的な進め方をやりたい。

Q 循環バスの利用状況について、利用者が少なく空車が多いが、財政面から見てどう思うか問う。

A **村長** ふれあい循環バスの運行には、年間440万円ほどの財政負担が生じている。

利用状況は、平成19年度の実績では1万1千人強、一日当たり38人という利用状況であった。

単純計算で一人当たりの経費が390円かかっているということだが、この数字をそのまま費用対効果の面から単純に廃止するという結論には現在のところ至っていない。

今年の3月にとりまとめた、「村総合公共交通計画」によると、利用されている方は温泉に行かれる高齢者、中でも女性の利用者がその多くを占めていることが判明している。

いわゆる交通弱者の高齢者の方の健康増進に役立っているという側面もあるので、他の交通機関に比べて利便性が高いという利点を活かしながら検討するという視点を持って臨むことが肝要であると考えます。

Q 利便性の高い循環バスにする為には、村はどのような対策を考えているか。

A **村長** 今の路線を活かしながら、順路の工夫で走行距離を短くしたり、有料化も視点に入れ、さらなる活用案として、土日は観光用のバスとして利用できないかなど、検討してまいりたい。

なお、バス路線や南阿蘇鉄道も含めてさらに検討を深めるため、南阿蘇村公共交通連携協議会という法定協議会で村内の公共交通体の再編基本方針案を策定して、今年の秋に実際にバスを走らせて、その結果を検証して最終的な公共交通の連携計画を策定する予定である。



循環バス出発式の様子